

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

姫将軍
リューネリア
2
漆黒の魔女

小説 葉原鉄

挿絵 ジェット世渡り

序章	凍てついた不死鳥のごとく	006
第一章	堕ちた姫君の誘惑	023
第二章	獣の烙印が胎を焼く	064
第三章	汚汁の沼に沈む誇りと玉座	107
第四章	神統墮落、公衆姦	152
第五章	姫隸胎姦	201
終章	暗い光に満たされて	243

登場人物紹介

Characters



リュウネリア・ソル・マトゥール

聖アグネリス王国の第三王女にして、一度は墮ちた姫將軍。新たに「蒼穹の龍吼軍」を率いて王都奪還を目指す。

メネトール・ノストラ

王族への忠誠心が厚く、リュウネリアには憧れを抱く公爵令嬢にして、「蒼穹の龍吼軍」の若き女騎士。直情的で気位の高い性格。

アラクネ

神統貴族と互角以上に戦う仮面の戦士。ダストカインの配下で、どこか精神が壊れたような印象を受ける妖艶な美女。

シグ・ルケン

リュウネリアを補佐する若き騎士。「蒼穹の龍吼軍」では情け容赦のない戦術家として一目置かれている。

パロウ

リュウネリアが救った村の少年で、小間使いとして働く。平和を愛し、平民による動乱よりも貴族による統治を望んでいる。

ダストカイン・ピストール

平民軍の首領で、魔駆けの首領ピストールの弟。貴族社会の完全なる破壊を目論んでおり、美しい貴族を醜い平民が蹂躪することに激しい快感を覚える。

「な、なぜ、そんなことを……」

回答は得られなかったものの、魔法の言葉を裏付けるかのように、貴族男たちは淫猥な指遣いと吸飲に身を任せ、心地よさげに口の端を緩めている。ぷつ、ぷつ、と透明な玉が竿先に出てくると、夢中になって腰を突き出した。秘裂には届かないまでも、姫君の尻腿にぬたりと粘りついてくる。

「はうっ、あああ……！ あ、あついい……！」

「リュ、リユネリア様、なんと甘いお声を……！ 女になられたのですな……！」

仕えるべき姫君を汚辱することで喜悅する男心が、ペニスの熱と先走り汁の粘つきとなつて、柔らかな尻肉を痺れさせる。リユネリアはますますの被虐感に鳥肌を立てた。

（わ、私のアソコに、みんなが興奮してるのかあ……いや、なのにい……！）

白い臀部でんぶが先走りにまみれて輝きを増すたび、雌唇は内側からきらめくような潤みを漏らした。しかし、物足りなげにヒクヒクッと蠕動もしている。食欲に快楽を欲する淫口を隠すことすら、手足を拘束されていてはかなわない。

艶やかさを増す一方の肉花弁は、家臣の視線を受けて含羞に熱くなる。獣や平民に見られたときとも違う感覚に、鳥肌じみたざわめきが子宮を突いた。

「お、おお、リユネリア殿下、間もなく射精しますぞ……！」

「獣液など我らの精で洗い流し、子宮の奥まで、我々の白濁でいっぱい……！」

それは、ゾクゾクするようなうわ言だった。ホグボアの体液にかぎらず、精液というも

のは雌を昂揚させる至上の媚薬だ。

「れ、冷静になれ！ ホグボアの体液は、つなぎなのだぞ！ 出されたら、おまえたちの種で、孕んでしまうかもしれないぬの……！」

クラントッドの二の舞で淫に狂ってしまうことへの恐怖に、リユーネリアは膝をわななかせた。

「あーあ、そんなこと言っちゃったら……んふっ、ちゅぽっ」

アラクネは愉しげに破顔した。頬を窪ませペニスを吸い、男たちの顔を見あげる。

姫将軍の言葉に、淫らな感動を催して打ち震える男たちの顔を。

「お、おお……わ、われらの子を、勇ましき姫将軍が、孕むと……！」

「ならば、け、獣の種を孕むぐらいなら、我らの種のほうがよほど……！」

「さぞや、さぞや姫様そっくりのお美しい子が生まれるでしょう……！」

アラクネの唾液をまとった肉棒が、姫将軍の素肌の上をずりゆずりゆと滑り回る。目に見えて充血の度合いが増していく海绵体を見あげ、リユーネリアはたまらない怖気と幾ばくかの期待に骨の髄まで震えた。

彼らはもはや、雄の本能に操られる傀儡^{くぐつ}だ。本当は直接ペニスを挿入し、メチャクチャに粘膜を擦り回して、子宮の奥にどろどろの濃くて熱い精液を注ぎたいのだ。

「や、やめろ、やめろお！ 出すな、出すなあ！」

叫ばなければ、膣肉を濡らす快楽衝動に飲みこまれてしまいうさだ。すでに白っぽい濃

密な愛液が太ももまで垂れているし、熱くなつた尻を突き出したくてたまらない。

(だ、だめだあ……！ クラントッドのときみたいに、狂っちゃダメだあ……！)

どんなに心に言い聞かせても——淫らな肉唇は微弱な性感電流にとらわれ、雄汁を飲みたがっているかのようにならうつすらと開閉をくり返していた。

「ひ、卑猥にございます、姫様……！ 辛抱できません！」

「おお、リユーネリア様、リユーネリア様！ お孕みください、お孕みください！」

「あはは、出しちゃえ出しちゃえ！ お姫さまのま〇こを精液樽にしちゃえ！」

アラクネの手と口がたくみに躍つた直後、男たちは感動に腰を痙攣させた。黒い帯が雌花卉の内側に食いこんで、着弾点を今まで以上に大きく割り開く。

「あひつ、ひやああッ、やめへえええ！」

ビリビリッと駆けぬけた快感に叫んだとき、声は呂律ろれつを失い甘くとろめく。

それが男たちにとっては最後の後押しとなった。

びゅぶぶつ！ びゅるつ、ぐびゅびゅつ！ びゅぐんつ！ びゅばあーッ！

魔女によって矛先をしつかり調整され、臭み汁を放つ先は寸分たがわず桃色襞の坩堝。白濁色がべたりべたりと張りついて、襞の狭間に染みこんでくる。

「ひあああつ……あーつ、あーつ、は、入ってくるう……！ あつつ、あああつ」

雄汁の熱に浮かされて、淫靡な身悶えが止まらない。激しく打たれる肉悦感と、こそばゆく擦られる快美感が、下腹を至福の脈動に満たしていく。縛られているせいで関節がよ

じれ、無用な痛みまで走るというのに、女の反応を抑えきれないことが呪わしい。高貴な輝きを失わぬ鎧が、かえって自分の身体の浅ましさを浮き彫りにするようだ。

「ははは、お姫さまが相手だとみんな精子の出がいいなあ。ほら、もつと出しなよ」

アラクネの手と口に導かれ、女を狂わせる白濁液が次々に飛びこんでくる。最初に入りこんできた精子が後押しされ、媚熱と粘着の感覚が腹の奥まで登り詰めようとすする。

「うくうう……し、子宮に、つくう……！ くそお、くそお……！」

リユネリアは淫楽を嘔み殺すように、歯噛みをした。子宮の間近まで精液が登るに到つて、ヘソのまわりの薄い皮下脂肪がプルプルと歡喜に震えた。快感に耐えきれない、雌であるがゆえの脈動だった。

——ちゅと。

最奥への到着の瞬間には、あつさりと顎が緩む。

「ひっ！ いあああ……せ、せいいい……！」

精子が子宮口にへばりつき、染みこんできた。下腹から脳髓まで悦楽の痺れが駆けのぼつていく。目が眩み、薄暗い地下牢に陽炎かげろうが立ったように見えた。

（せ、精子というのは、こんなにも気持ちいいものだったのか……！）

子宮の神経が直接舐めずられているような、腰の碎けるほどの女の悦びだった。桃色の花弁穴は感悦のあまりに開閉して、腔内に糸が伸びる様を見せつける。

「はおおお……あおつ、ひゃんつ、あああ……！ あつひいい……！」

ひどく気の抜けた声が鼻から漏れる。尻肉を波打たせ、乳房を床で押し潰した。

「ひ、姫様が、私の精を受けて、女の声をあげるとは……！」

「ち、ちがうう……あつ、熱い、いやああ、中は、ダメなんだあ……！」

肉欲のままくり返し精を放つ貴族と、それを腹に溜めこんで身震いする第三王女。その様を牢の外で見学していた獣人たちが、ハンツと鼻で笑う。

「どっちがケダモノだ。おまえたちだつて、食つてやるだけの、いきものじゃないか」

リユーネリアは異論を唱える余裕もなく、子宮がゆっくりと精液樽に変わっていく感覚に、甘く静かに尻を揺らしていた。腰骨が勝手に蠢動するのだ。

（うず、くう……！ 精子のせいで、中がビクビクしてとまらない……！）

ホグボアの体液と貴族の精子を注がれて、雌の本能が活発化している。ペニスを見つめる碧眼も、グラスに注がれた果汁のように甘つたるく揺らめいた。

舌を嚙んで、すこしでも痛みを思い出そうとした。心を駆りたてる戦いの痛みを。シグに突き放されたときの心の痛みを。

やがて、長々とつづいた射精も終わった。貴族男たちは暗い笑みを浮かべて、膣から外れた肉汁を尻や陰阜に塗り伸ばす。

「おおう……これで神統の血脈は安泰……」

「姫様、お悦びください……」

うまく膣内に注がれた白濁も、重力に引かれてどろりと地面に落ちていく。そのこそば

ゆさに姫將軍は屈辱の胴震いをした。

「うう、おまえたちい……なぜそうまで、墮ちてしまったのだ……!」

「拷問されて媚薬を毎日飲まされてたら、こういう風にもなっちゃうよ」

アラクネは腔口に尖らせた唇をつけ、ぢゅると精液を啜った。リユーネリアの腰尻が、粘膜穴で流動する液感に硬直する。

「くんっ、ひあああ……っ」

「ぢゅるっ、ちゅうう……んふっ、このおいしい孕ませ汁はね、キミだけじゃなくて、醜い雌の獣人や魔獣を孕ませるためにもぶちまけられたんだよ」

魔女の口腔で舌が踊り、白濁汁でニチャニチャと音をたてる。

「貴族女も当然、魔獣の雄とつがわせてるよ。そうしてね、魔獣や獣人の赤ん坊に貴族の血を混ぜるんだ。そうすると、どうなる?」

同胞に汚されたことで麻痺しかけていた思考が、怖気立ちながらも回転を再開する。

獣人たちのおぞましい企てを理解し、音をたてて固唾を飲んだ。

「次の世代では……おまえたちは、貴族の体液を啜る必要もなくなる」

おそらく正解なのだろう。アラクネはにっこりと笑った。

獣人の最大の弱点は、超人的な力を保つために一定数の神統貴族を確保して、定期的に体液を摂取しなければならないところにある。その弱点がなくなれば、獣人の脅威は現在の比ではない。

なにより恐るべきは、力の源として価値がなくなれば、貴族を生かしておく理由もなくなるということだ。

「貴様ら……神統貴族を、根絶やしにするつもりか」

「そんなことしないよ。神統貴族はこれからの歴史でこう記されるんだから。永遠の奴隷、獣の愛人。この世でもっとも穢れた生き物——とね」

根絶やしよりもずっとタチが悪い。これから神統貴族はいつ果てることなく、恥辱の歴史を歩むことになるのだ。

怖気が止まらない。彼らの計画のおぞましさもさることながら、次世代を見据えて計画を練っていたという事実そのものが薄ら寒い。平民の反逆は刹那的な衝動任せでなく、歴史すら覆そうという遠大な計画の一端にすぎないのだ。

「せっかくだし、穢れた生き物らしくもっと汚れてもらおうかな」

脚長の闇が蠢いたかと思えば、リユーネリアはひっくり返されて大股開きの下半身を真上に向けさせられた。ヒクついている膣穴が先ほどまでより男根たちに近くなる。

「な、なにをするつもりだ、アラクネ……！」

「だーからあ、もっと汚れてもらうんだって。精液くさくて汚いものでね」

アラクネは糸ほどに窄めた黒い帯をさらに何本も放ち、萎えかけたペニスの先の穴に貫通させた。男たちは痛みでなく、快楽のあまりにうめきをあげる。魔女の哄笑に獣人たちの下卑た忍び笑いが重なり、地下牢を禍々しく覆った。

呆けたように腰を震わせる男たちには、もはや表面上の忠義すら見てとれない。魔女に怯えながらも、自分たちの汚した姫君の股に瞠目している。

「あ、ああ、こんなに精液まみれに……つ、次は、小水まみれになるのか……！」

リユーネリアは無力な子羊のように「ひい」とうめいた。

「そ、そんなものを出すな！ や、やめてくれ！ 頼む、かけるな、かけるなあ！」

ちゅぽ、と錐状の黒帯が鈴口から抜き取られた。無様な金切り声をあげる姫將軍へと、男たちの生理的な排出液が放たれる。

ぶしやあああああーッ！

金色の尿が膣に溜まった精液を打ってしぶきを散らした。想像以上に強烈な衝撃が、ビチビチッと淫肉の奥まで響いてくる。

「くうう……！ んっ、あむううう、いああ……！」

かすかな快感に贅肉が震えるが、それ以上に屈辱感が強すぎる。強張り、歪んだ王族の美貌へも、狙いの逸れた放物線が降り注ぐ。

(ひい、き、気持ちわるい……！ お、おのれ、おのれえ……！)

あお向けでかすかに脇へたるんだ乳房へも、艶やかな髪さえも——すさまじい悪臭と、精液以上の熱に搦めとられていく。

「どうしたの？ 金色は王族の象徴だよ？ あはっ、おもしろいよね、あははっ！」

信じがたいことに、アラクネは姫君の股のそばで嬉しげに口を開いていた。真っ向から



放尿を受けとめ、喉まで鳴らして嘔下している。

禍々しくも官能的な情景に、リューネリアは耐えがたいものを感じて、まぶたを閉じようとした。

その寸前、魔法の艶やかな黒髪が尿のてかりを帯びて、日差しのような金色にきらめく。
(え……?)

卑猥に歪んだ口元が、そのそばに付いた一点のほくろが、記憶の中のだれかと重なった。鼻を突く悪臭に包まれながら、姫君の鼓動が爆発的に高まっていく。

じよぼじよぼと排尿の跳ねる音が収まるころ、リューネリアは屈辱と猜疑心に突き動かされて口を開いた。

「おまえは……本当は、だれなんだ」

「ん？ だれって、ボク？ ええと、だれだっけ」

ふざけているのか真剣なのか、アラクネは腕を組んで悩みだす。

「えっとね、ボクね、ダストカイン様や獣人のみんなにたくさん犯されたんだ。逆らったらくさん殴られてね、刃物で切られたりしてね、ダストカイン様に殺すって言われてね、怖くて、命乞いして、嫌なのに犯してくださいっておねだりしてね」

まるで他人事のように、魔法は過去を語る。

「そうしてたらね、気が付いたら——そう、昔の私は死んでいた。ああ、そうだ。ボクは昔、ボクのことを私って言ってた。変わったなあ、昔は髪も立派な金色だったのに」

亀頭の半分ほどしか入っていないが、鈴口的位置が固定されて膣内に精液が滑りこむ。

どぶんっ！ びゅばっ！ ぐびゆるばっ！ びゅっ！ ばばっ！

「んくうううッ！ な、中あ、入ってくるうう……！」

膣穴がきゆるきゆると窄まって、生臭い肉汁を咀嚼した。それほどまでに、雄肉の味わいはリユーネリアの雌粘膜を歓喜させている。

（こ、これえ……一年ぶりの、おちんぼ、中出し、すごい……！）

脳が痺れて顔が呆ける。相手は父母兄弟を殺して名誉を汚した怨敵だというのに、興奮が止まらない。

本当ならシグにしてほしかった行為なのに、広がった笠をねじこまれると、反射的にしなやかな脚を太い腰に絡めてしまう。半閉じだった雌肉の割れ目は青筋の浮いた棒の形に拡張されながら、襷を使ってねっちよりと吸着する。もつと奥まで差しこんで子宮に粘濁を叩きつけてほしいと、身体がダストカインに媚びていた。

絡みつく肉壁を、巨漢が激しい腰遣いで強引に掻き擦りだす。淫肉を根こそぎえぐり、子宮口を殴りつけるピストンに、精液と愛液が見る間に泡だつて溢れ出した。

ぼちゅんッ！ べぢゆるうッ！ ちゅばッ！ じゅぢゅッ！ ごちゅッ！

弾ける水音は背もたれで後頭部を打つ音も紛らわせるが、腹の底から押し出される淫声には及ばない。

「えくッ、えぐれるッ、あううう！ おま〇こ壊れるう、こわれるううああああ！」

「王族の膾がこの程度で壊れるものか。オルトリアには大蛇の頭を差しこんだこともあるぞ。蛇が口を開くとき、あいつめ泣き叫んで許しを請うた。ブタのような喘ぎなどはあげなかつたがな！」

王女のはしたなさを罰するように、ダストカインは首をつかんで頭を背もたれに思いきり押さえつけてきた。腰を振りながら近づけてくる顔は、脂ぎって禍々しい光沢を帯びている。なまじ人の顔を保っているのが、イボイノシシよりも醜悪でおぞましい。

彼は引きつれた口を窄めてツバを吐き出してくる。顔を固定されたりユーネリアは避けることができず、痰が混じったようなツバを浴びた。

「ひやあッ、んくっ！ く、くさい……！」

「ぐふ、うう、おまえの醜い顔を目に焼きつけておいてやる……俺に犯されて股を熱くするなど、醜すぎて絵に描くこともできぬ。ブタめ、おまえも俺の顔を覚えておけ！」

ダストカインは自分の吐いたツバをリユーネリアの鼻面から頬や口元へ舐め広げた。並の精液より強烈な刺激臭と相まって、嫌悪感とともに心地よい墮落感が子宮を沸かせる。

「んひゃあつ、あんんうっ！ く、くさいい、わたしくさくなっちゃううう！」

浅ましい獣に堕ちてしまいそんな恐怖と戦いながら、膾悦に身をくねらせる。

(シ、シグう……！ それでも、私は耐えるからあ……！ おま○こ気持ちよくて、臭いのドキドキしてるけど、まだ私は、私のままだからあ……！)

すべては彼の作戦を成功させるため。彼とふたたび出会うため。

その目的のために、恥知らずな嬌声で快楽を謳う。

「どうして姫殿下は……そんな嬉しそうな顔をなさるの……！」

男の上で腰をふり続けるメネットの目に、軽蔑の色が濃くなるうとも。

「ひ、姫さま……あんなに大きく口を開けて、いやらしい声をあげて……」

伝言を伝えてくれたパロウにすら、純朴な驚きを向けられようとも。

（え、演技だからあ……シグが助けにきてくれるまでの辛抱だからあ……！ そんな目で、見ないでえ……！）

罪悪感にすら熱くなる秘肉に操られ、みずから腰を振って玉座でよがる。

「ふん、そうか、ぬう、ねじりを利かせてほしいのか」

「あひゃつ、んんんんんんーッ！ お腹こわれちゃうう……！」

自分の腰と逆回転で掻き回され、白い下腹に肉棒の陰が浮かんだ。どれほど巨大なもの
で犯されているのかを目で見て、頭がパチパチと白熱する。シグの顔が遠のいていきそう
になるのを、拳で握りしめてどうにか繋ぎとめた。彼への恋心すら失ったら、もう悦楽地
獄に抗うこともかなわない。

不意に腰が握りしめられた。骨がきしむほど、荒々しい雄の力が感じられる。

「ブタはブタらしく犯さねばならん」

玉座から持ちあげられ、結合部を支点に反転させられた。膣肉がごりごりゆと削れる
ような媚痛に酩酊しながら、床に手をつく。ダストカインが立ったままなので、リユーネ

リアも長い脚を八の字で伸ばしたまま背中中で傾斜を描いて四つん這いとなった。

不安定な姿勢で思いきり突かれて、肘がガクガクと震える。体位が変わったためか、子宮にぶつかる勢いが先ほどまでより強い。衝突の快感が喉まで駆けのぼって、間抜けなぐらい大きな喘ぎに変わる。

「あひんッ！ ひあああッ、お、墮ちちやううう……！ んおおおおッ」

戦士にしては細すぎる顎の先から、ダストカインにかけられたツバと自身のヨダレが混じって垂れ落ちた。黄土色の仔猪が鼻息まじりに床の唾液を嗅ぐ。

「パロウ、その hogボアを抱えて、股ぐらをリユーネリアの顔に擦りつけてやれ」

「は、はい」

怯えた声でパロウは従い、たっぷり肉の詰まった幼獣を抱き上げた。リユーネリアの眼前で股ぐらから肉茎がむきりむきりと伸びあがる。ダストカインとは逆に、大きさこそ人間の成人男性と同程度だが、形はねじくれた螺旋状。かつてリユーネリアに妊娠のきっかけを与えた、hogボアという生物特有のペニスが、そこにあった。

「あ、ああ……hogボアの、匂い……！」

臓腑が、腔肉が、ヒクヒクと震える。怖いのか興奮しているのか、わからない。

パロウの細腕が緩んだのか、金髪の後頭部から背中へと仔hogボアの胴体がのしかかる。ダストカインの突きこみに押され、リユーネリアは仔猪のペニスに口を近づけてしまう。

だらしなく開いた口腔は、獣の肉棒にすら唾液をこぼしながら、排泄物同然の匂いの塊

を喉の奥まで招き入れた。

「ぐぶっ……あおおお！」

肉棒に刻まれた螺旋状の溝に、舌が吸いこまれるように粘りつく。いったん張りつくと、熱に浮かされ味覚器は自動的に獣臭さを舐め擦りだした。

(いやああ、気持ち悪いのに……舌もヨダレも止まらないなんてえ……！)

はたして、どこまでが演技なのだろう。被虐の極みで四肢がわななき、艶美な背筋がさらに急勾配に傾いた。腰ばかりはダストカインにつかまれているが、ピストン運動の加速で股関節が快美な麻痺感に包まれていく。その痺れは股から滴る白濁液を追って、脚の先から乳房の熱い尖りにまで広がっていく。

「どうだ、重いか……！ 平民の頭にのしかかっていた神統貴族という存在は、もっともつと重かった！ 糞にまみれて生きる者もままあったというのに、おまえたちは塵ひとつない王宮でこんなに美しい姿で君臨していた！ ふん、中はこんなに粘ついて、俺のような醜いものを悦ばせているくせに……苦しめ、苦しめ、神統貴族の姫將軍め！」

激しい物言いだ、声質が歪んでいて感情を読みとれない。怒っているのか、悦んでいるのか。ただ、言葉などは彼の不気味さを人の賢しきで誤魔化すようなものだ。リューネリアにとっては、極太でくり返し突かれるという単純な雌の快楽ばかりが恐ろしかった。身も心も揺さぶられて、手足まで膺のような性感肉に変わってしまった。

金の軍靴はギリギリと床にこすれ、金髪の大尾と黒の前垂れは切なげに揺れる。リュー

ネリアは揺れるまま喉奥まで使って、演技のつもりで、獣に口淫奉仕をした。

「ぢゅぽッ！ んぶうううう、ごぶおっ！ うああッ、苦ひいいいっ、あああああ！」

ダストカインに劣らぬ腰遣いで、容赦なく喉の深い部分を突いてくる。吐き気がこみあげても、胃液が迸ることはない。そうならないよう、かつて平民たちに口の使い方を仕込まれたのだ。

火照った頬を膣肉のように窄める。桜色の唇も最大限に使うため、秀麗だった鼻の下を伸ばしてごしゅごしゅとこすりつける。唾液が愛液に劣らず溢れ出して、潤滑をどんどんよくしていく。

（あ、あのとときの私に戻ってるう……チンポ好きの家畜になって、ホグボアのチンポしゃぶり回して、オマ○コびくびくって痙攣させてるううう……！ シ、シグウ……！）

女としての恋心も、細胞に染みついた戦いの記憶も、膣穴をえぐられる快感に飲み込まれようとしている。女でも將軍でもなく、艶やかな肉肢の雌豚になりつつあった。

パンッ、と激しく膣奥を打たれ、ペニスがあぐつと膨れあがる。

「ぐふう、ぐふう、本気の精子を、出してやる……！」

つまり、先ほどまで出しっぱなしでいまだ股から滝のように流れ落ちている黄ばみ汁は、ガマン汁のようなものだということか。もつと濃くて、もつと熱くて、もつと女を孕ませる力をもったものが、肉襞を殴りつけるような脈動とともに射出されようとしている。口内では豚根があぐねりとねじれて射精を準備していた。

「んぼつ、あぶうう、いやああ、らめ、らめええええ！」

一年間、悪夢と吉夢の狭間で思い描いていた至福の瞬間が、今まさに訪れようとしている。狂ってしまうかもしれない。心に打ちたてた最後の砦すら砕かれかねない。

そんな状況でも身体は男の歓喜に応じるように、唇と括約筋を締めつけて歓迎している。リユーネリアは自分の浅ましさにとうとう涙をこぼした。

腹肉で尻をバチユツと叩かれ、子宮が突かれたとき、リユーネリアの全身は最高潮の期待感に燃えあがった。

「んぐうううっ！ くひいいいッ！ く、るううううう！」

扇情の紅に腫れあがった膣内で、とうとう肉汁の小爆発が巻き起こった。

びゅぼぼッ！ ぶびゅぼッ！ びゅううッ、びゅぼつ、びゅぼッ！

雄欲に煮立った糊の塊は、子宮が浮かぶほどの衝撃で、淫に堕ちた姫君の心身を屈辱のオルガスムスに導く。待ち望んでいた、女の悦びだった。

「おほおおおおおおッ！ んひいいいッ、ひくいくイクうううう！ ぐんんんんッ、ひきゅう壊れうぐらひしゅごひいいいあああああああああッ」

押し潰されてのけ反ることもできず、ただ小刻みに全身を律動させた。

迸る断末魔の声を、ホグボアの射精が迎え撃つ。液質の強い白クリームが長い矢となつてびゅーびゅーと食道を穿つ。成獣でなくとも、すさまじい噴出量は常人の射精とは比べものにならない。子宮も胃袋も一瞬で重みで満ちて、たちまち逆流する。



(あああ、お、おちんぼみたいなの、舌あ……！)

もはや条件反射のようなものだ。それはとどころに溝と小穴がついていて、ひどく醜悪な男根というべき形をしていた。器用に蠢き、懊悩する姫君の顔を舐めずってくる。ぬめりと摩擦感に口元を縁取られて、リユーネリアはようやく自分が緩みきった顔をしていることに気づいた。

「あんっ、はああ！ お、おちんぼで顔いじめるの、やめてええ……！」

飽和した口中の湿りを何度も嚙下する。欲求は耐えがたいまでに膨れあがった。

(しゃ、しゃぶり、たいい……ああ、でも、ダメえ……！ これ以上、おちんぼまみれになつたらあ、もう、もう……)

はあ、はあ、と息を乱して何度もツバを飲みこんだ。

「せつぷんをしる……ブタ女の、だいこうぶつだろう」

ダストカインはそう言いながら、膣奥をグリグリとこすり回した。肉がえぐれて子宮口がぱっくり開きそうな悦楽感に、リユーネリアは乳首を尖らせながら感わされた。

「あグッ、ひゃんんッ！ あああッ、わ、私、の……大、こう……ぶつう……！」

雌をよがらせて狂わせるための赤黒い肉の塊。膣と擦れあうだけで、パチパチッと愉悅の電流が弾ける魔性の剣。今まで何百回と自分を絶頂に導いた造形を前に、すこしずつ、舌が、自制心を振りきって、口腔から伸びていく。

(あああ、もう止まらない……！ おちんぼ……なめ、たいい……！)

触れるか否かのところで、ペニス型の舌から蜂蜜のような粘液がこぼれてくる。

それが舌先に粘りつくと、甘くて苦い不気味な味に口内が燃えあがった。

「あああ、お、おちんぼの、味い……！」

人としての尊厳を溶かす甘美な熱に、表情はますますとろけていく。しつかり咀嚼して、発酵したような臭みを味わっていると、どれほど穢れた相手に犯されているのか実感できた。そして、自分はそれ以下のいやしい生き物なのだ。

（ああ、あたしもう、逆らえないいい！ こんなバケモノの家畜になったまま、赤ちゃん産まされちゃう……！）

陰惨な歡喜に膣肉がぞくりと震えた。肉壺が泡だつて細かな襞々がくちゆくちゆとピストン棒をしゃぶりたてる。ぐう、というダストカインのうめき声が彼の舌を震わせ、さらなる唾液を滴らせた。リユーネリアだけでなく、左右で姫將軍を押さえこんだふたりも舌を伸ばして背徳の口づけに参加する。

「んちゅっ、ぢゆるうう……あはっ、もう強がる口実もないよね、リユーネリア」

「醜い平民に身を汚されて、悦んでしまうのが姫殿下……なのですね、んちゅう」

ふたりとも頬笑んでいた。アラクネは心からの歡喜の最中で、メネットは自棄の果てで、リユーネリアに頬ずりをして、唾液の粘りを分かちあう。

彼女たちの手は双乳を根元から先端へと搾りあげていた。乳首に集中した血流と快感が、ジンジンと乳腺を刺すような麻痺感を呼ぶ。

「おひッ、オッパイいいい！ ひぎいっ、ちくびい、ひやああ……！」

乳首が人差し指の先ほどの大きさに膨らんだ。アラクネにつままれると、パチッと熾烈な電流が走る。感電によつて奥底からなにかが引きずり出されてきた。

「あああああーッ！ あっ、あっ、で、出る、なにか出て、くるうううう！」

声は裏返つてはいても苦痛の声ではない。潤んだ眼としつとり赤らんだ頬が示すとおり、リユーネリアの心は胸の奥からこみあげる快楽に蕩揺しきつている。

びゅぷっ！

豊乳の先から白いしぶきが飛び散り、バルコニーから民衆の上に降りかかる。屈辱的な馬鹿笑いで、リユーネリアの母乳は受け入れられた。

「うあああ、ぼ、母乳う……！ くんっ、あああー！ 出るううう！」

量感たつぷりの美乳に満たされ、蓄積されたそばから噴き出していく。乳肉の軽くなるような錯覚に、淫猥な愉悅とともに爽快感すら覚えた。

「姫殿下は平民の子を育てるために、身体のお芯まで墮ちてしまわれたのですね……ああ、姫殿下、姫殿下……いやらしくて、きたならしい人！」

メネットは泣き笑いを浮かべ、乳首を強引に自分の口元までつまみあげた。長く伸ばされ張りつめた授乳袋から迸るミルクを、ぢゅぱぢゅぱと音をたててしゃぶりたてる。

「くんくんんんんーッ！ バケモノの赤ちゃんに飲ませるミルクう、ああああ、びゅるびゅるって、あひゃんっ、びゅ、びゅるうううっつていっばい出るうううう！」

もはや後戻りのできない実感が、全身に積みあげられていた。母乳を嘔き出して快感を放つ胸も、巨根を圧搾して喜悦する膣も、妖異な舌と唾液を舐めて熱くなる口舌も——痴態を大勢に鑑賞され、嘲りの歓声にびりびりと媚悦を感じる素肌すらも。

「もつとだ……もつとおかして、もつとといういろなもの、出させて、やる」
ダストカインはいったんリユースネリアを持ちあげ、張りつめたままの逸物を抜いた。空洞となった膣内に寂しさが満ち、涙のような愛液がしとどに流れる。

「あつ、ふああ……お、ちんぽお……！」

「ちよつとぐらいガマンしなよ、お姫さまのくせに」

「もう無理なのでしょう……この方はもう、ただのブタにすぎません」

魔女たちにおお向けに押さえられ、空の青さに言いしれぬ劣等感を覚えた。視界にダストカインの白く醜い姿が現れると、安堵の気持ちすら湧いてくる。

「ほしいか、おれの、ふといものが」

開いた脚の間から反り返った逸物を突き出され、禍々しさと雄々しさに胸を高鳴らせた。メネットの言うとおり、すでに高潔な姫君はここにいない。

祭壇の生贄のようにベッドに横たわるのは、快楽を求めて、開きつばなしの淫欲穴を物欲しげに持ちあげる一匹のメスブタだった。

（あああ、このおちんぽ、やっぱりすぐく太いい……！ これで、もつと、もつと気持ちよく、なりたいいい……！）

腹がズキンと痛むのは、赤子が母を責めているからだろうか。それでもリユーネリアは、海のようにきらめく瞳が肉欲に染まっていくのを止められない。

「く、くだ、さい、くださいい……！ はああ、ほしいい、おちんぼほしくてアソコさびしがつてますう……！ 平民様のおちんぼで、私をブタにしてくださいい！」

「ぶた、め！ みんな、みろ！ ブタがみにくく鳴いているぞ！」

「あんんううッ！ きつ、きたああああ……おちんぼお、ごりごりきたああ！」

湧き出す快感に突き動かされてエビぞりに反った瞬間——めくるめく墮落の悦びが血脈に乗って流れこむのは腹の中。

びくん、と胎内の赤子がひときわ大きく跳ねた。

「ぐっ、ひいひい！」

子宮の内側から圧迫されると同時に、ぐぐう、とダストカインの巨根が子宮頸に突き刺さってきた。悦楽にふやけた微細な小径こみちは内外から強引に割り開かれて、ちょうど中央で両者を対面させた。

「お、お、かんじる……あかが、おれのちんぼに、ぐりぐり当たってる」

快楽に溺れたはずなのに、リユーネリアはその言葉に寒気を覚えた。

「んひっ、らめええ……！ 赤ちゃんが、赤ちゃんがあ……んあああッ！」

よがりながら喚いた言葉に、自分でも驚きが隠せない。

暴力的な責めを受けて腹の子は無事なのかと案じてしまう。呪わしくて仕方のない存在であろうとも、その半分は自分の血でできている。おぞましくとも我が子なのだ。

だから肉茎が《彼》を押し返して、子宮頸をくぐり抜けようというとき、將軍としても女としてでもなく、母として快感に抗い、涙目で懇願していた。

「や、めてえ……ひゃんっ、その奥う、赤ちゃんがいるから動かないでえ……！」

しかし、姫君の弱気な声はどんな豎琴よりも美しい音色で、猛獣の嗜虐性を刺激する。頭上から痰の絡んだようなうめき声が聞こえた直後、

ぐわり。

と、子宮頸にすさまじい内圧がかかった。出産前で開きかかっていたとはいえ、突然の刺激に灼熱感が迸る。

「かつ、あはっ、んほおおおお！ 裂けッ、るうううう！ あああああーッ」

「ふふ……ダストカインさまのおちんぼはね、花のつぼみが開くみたいにパツクリと割れるんだ。そうして子宮から抜けられないようにして子どもを孕ませるんだけど……」

アラクネは羨望を隠しもせずに嘆息し、リユーネリアの耳をかじった。

「くんっ、はああ……！」

耳の刺激もこそばゆくて声が漏れる。それ以上に、割れた亀頭が子宮の入り口に引っかかって、グリグリと動かされるのが効く。火照った下肢が跳ね動いた。

ガクガクとわななく妊婦の媚態に、突如ぬつとりと黄濁色の粘液が滴ってきた。ダスト

カインの異形の身体が充血し、いたるところから体液を垂らしている。鼻が塞がるほどの悪臭、神経が脈打つような熱さ、そして皮膚を舐め擦るような粘着感。どれをとっても、かつてクラントッドで味わったものとそっくりおなじだった。

「ひあああ、ホ、ホグボアあ……！」

「ほぐぼあ、だけじゃない。おれは、色んな獣の色んなものを合わせもってる」

「次……すごいんですのよ。あたくしも、この姿になってすぐに味わわされてしまいましたわ。頭がおかしくなるぐらいに……」

メネットは過去によがったことを悔やむように歯噛みをした。口には堕ちた姫君の乳頭を咥え、尖った牙を突きたてながら。粘膜が貫かれる寸前の痛と悦にリユーネリアの背のけ反り、母乳を噴出した瞬間、腔肉に挟まった剛直がぐねりとうねった。

「んぐッ！ あっ、あうんッ、おひいひい！」

同時に子宮の中で赤子が激しく身じろぎをする。羊水がくちゆくちゆと音を鳴らし、子を包む膜が薄く引き伸ばされるほど激しく。

「あ、暴れちゃ、ダメえ……！ あう、あああ、や、破れちゃうううッ」

「おれがやぶるぞ、ようまくを。おれのちんぽは、にだんこうぞうだ」

腹中で花開いた亀頭の中心から、ぬう、となにかが首を出した。

腹の中でぷつりと膜の破れる音がする。

（よ、羊膜を、突き破られた……！）



醜い怪物にふさわしく残酷で淫猥な行為だ。リユーネリアはその痛みと愉悦と恐怖に身を竦め、子どものように泣きだした。

「あう、ああああ……うわああああああ！」

すぐにも溢れ出しておかしくない羊水は、ぱっくり開いて出口に密着した男根によって子宮に閉じこめられている。腹の中で流動し、無法な男に汚されて感悦する母を責めるように、赤子とともに粘膜を掻きむしる。

罪深な母胎は内側を突き回されて、なお心地よさげに身悶えしていた。高感度の性感帯がどのような痛みも屈辱も、たやすく愉悦に変えてしまう。

「くうん、きもちいい……もう、いやああ、なにされても気持ちよくなるうう！ ふあんつ、あああ、いやあああ、こんな身体いやあああ！」

泣き喚いて許されるはずもなく、亀頭から現れたものはさらに長く伸びあがり、赤子を押し分けて子宮の最奥を突きあげてくる。横隔膜まで痺れ返る圧迫感こそが、メネットをも狂わせた二段構造のペニスなのだろう。

花びらのように割れた亀頭が子宮を捉え、内側から伸びたもう一本の肉茎が子宮壁をこぢゆこぢゆとこする。ダストカインが腰を揺するたび、クルミほどの大きさの塊で子宮内が掻き回された。自分の城を蹂躪された赤子は、負けじと身をよじってくる。

強烈などというものではない。丸まった腹いっぱい粘膜への摩擦感が満ちていく。子を慈しむべき母性の象徴が、悦楽まみれの肉袋と化した。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>